

の理論構成に於てその傾向は高次の段階に躍進したといひ得るであらう。然しこのことは直ちに單なる合理主義の勝利とはならない。古典的理論と區別せしめる量子論の根本原理とも云ふべき不確定性關係は單に一個の實驗的事實の表明に止るものでなく、對象に對する主觀の積極的關與に基くといふ意味をもつ。これによつて、實驗測定は單に相獨立した別個の客觀に對して主觀がこれを何處までも正確にこれを模寫するといふ如きものでなく、物理學の自然と雖も何らか表現的意味をもつことが明になる。實驗と理論との相關に最も忠實ならんとした量子論に於て、從來の實驗の概念に豫想されてゐた素材實在論の支持すべからざることが露呈せられ、實驗に於て自己を顯はにする自然は單に「純粹悟性的の原則」にて悉くし難きものとなる。かくの如き内容を盛る數學そのものも亦新らしく省察さればならぬ。昔、ニュートウンの『プリンキピア』の『批判』が先驗論理學を要望した如く、「新科學」が此處に又新らしき論理學を要求してゐると云ひ得るであらう。哲學がその時代の精密科學と聯關をもつべきことは哲學の光輝ある傳統である。この聯關を疎にすることは哲學自身の内容を乏しくせしめるのみである。哲學者は屢々「科學は假設をもつ」ことに安堵を感じてゐる。自らはからずして科學に對して假設をもつことがないであらうか。

(紹介者 下村寅太郎 岩波書店、武田三拾錢)

彙報

倫理學讀書會

五月二十六日(金)后三時より演習室に於て

Natorp, Praktische Philosophie

内田文雄君

美學會

六月六日(水)后七時より樂友會館に於て

書

伊東卓治君

寄贈圖書

體育論集

阿彌陀如來之研究

村地、二宮、寺澤、大谷監修、日黑書院刊
八橋徳次郎著 岡書院刊

寄贈雜誌

哲學雜誌	六月號	理想
丁西倫講演集	同	金雞會報
社會學徒	同	顯真
哲學改造	同	同
學校教育	同	漢學會雜誌
信濃教育	同	宗教研究
		五月號